

ドイツ軍戦力低下一覧表を読み解く

当初は、ゲームデザインとして「表面戦力の1/4(端数切り捨て)で裏面のKG/BG戦力の決定」となっていることから、機械的に「一律な戦力係数」として戦力段階を考えた。

-1=(*0.75) -2=(*0.50) -3=(*0.25) -4=Eliminate である。

ドイツ軍空挺部隊

ドイツ軍空挺部隊の運用を考えると、<2-5>Ab.Rg.=降下連隊は最大降下規模であるが、実際の最小降下規模は降下中隊である。最小降下規模であるこの降下中隊をどうやったら表現できるかを考えた。最初はゲームデザインに合わせようと思った(初版及び第2版)が、「一律な戦力係数」は師団⇒旅団⇒連隊⇒大隊⇒中隊⇒小隊という編制単位を考慮していないことから、「実際の部隊運用とうまくかみ合わない」のだ。<2-5>Ab.Rg.を4分割したものを1個中隊と考えた場合、積み上げも2単位/4単位編制となり、現実の3単位編制と全くかみ合わなくなる。

<2-5>Ab.Rg.

$$-1/4(*0.75)=1.50$$

$$-2/4(*0.50)=1.00$$

$$-3/4(*0.25)=0.50$$

をさらに4分割と6分割を統合させた7分割(2/4と3/6は同じ値になるため8分割にはなり得ない)の表へと細分化し、ボトムアップで部隊規模を考えることにした。

<2-5>Ab.Rg.					Ab.Rg.						
	Full	(*1.00)	2.00	F		F	Rg.=Bt.x2 =Co.x6				
	-1/6	(*0.83)	1.66	-1		-1					
-1/4		(*0.75)	1.50	-2		-2					
	-2/6	(*0.66)	1.33	-3	<1-5>Ab.Bt.KG			-3			
-2/4	-3/6	(*0.50)	1.00	-4		Full	(*1.00)	1.00	F	Bt.KG = Co.KGx3	
-	-	-	-			1/6	(*0.83)	0.83			
-	-	-	-			1/4	(*0.75)	0.75			
	4/6	(*0.33)	0.66			-2/6	(*0.66)	0.66	-1	Co.KGx2	
3/4		(*0.25)	0.50			2/4	3/6	(*0.50)	0.50		
	5/6	(*0.16)	0.33			-4/6	(*0.33)	0.33	-2	Co.KGx1	
-	-	-	-			3/4	(*0.25)	0.25			
-	-	-	-			-5/6	(*0.16)	0.16	-3	Pl.KG	
-	-	-	-					E	-4		

という結果が得られた。

第7空挺師団の1940年中の降下作戦は、師団運用として降下作戦が行われたわけではない。当時の傘下2つの降下連隊は2個大隊編制であるが、完全編成ではなかった。最終的には第1降下連隊がデンマーク及びノルウェー方面のウェーゼル演習作戦に、第2降下

連隊が低湿地諸国の黄号作戦にと担当区域を分けられ、それぞれ大隊規模から中隊規模での降下作戦となった。戦力段階に<1-5>Ab.Bt.KGを加えたことで、「現実の部隊運用に近い統合と部隊分割が可能になった。ここから、「Bt.KG=大隊」を基本部隊として積み上げて行く作業が始まった。この過程で、「補充ポイント相当分」も見直すこととなった。

この方法は、「生産及び野戦補充に関するオリジナル・ルール部分を全く無視した」ものだ。例えば、「6補充ポイント毎に1ポイント消費して裏面へと戦力低下した部隊を表面の部隊に戻せる」というルールは、この場においては通用しなくなる。オリジナル・ルールは「野戦補充大隊から補充部隊を得ることを再現」したものだ。ここでの問題は、「実際に補充としてどのくらいの兵力が各野戦補充大隊から送られてくるのか」ということだ。「野戦補充大隊=3個中隊が全戦力を補充に当ててしまうと、野戦補充大隊としての能力がなくなってしまう。だから野戦補充大隊としての機能を維持し続けるためには、最大でも2個中隊の補充が限界」なのだ。複数の補充大隊から補充部隊を集めることで、大部隊の補充が可能となる。6個野戦補充大隊があれば、12個中隊=4個大隊分=2個連隊分の野戦補充が可能となる。これを根拠に「6補充ポイント毎に1ポイント消費して裏面へと戦力低下した部隊を表面の部隊に戻せる」というルールが作られている、と考えることができる。しかし、実際の部隊は、「回復先の部隊種別」によって「回復に必要とするBt.KG数=補充ポイント数」にも差があるはずだ。

ドイツ軍装甲師団配備・改編状況（1939～1941）

そもそも、ドイツ軍の戦闘力はいつの時点に何を基準に算定されたものだろう。元々は、『War in the East』（以下、WiE）として作成されたものである。ドイツ軍はソ連侵攻前に「1939年型装甲師団」と「装甲擲弾兵師団」の各1個を組み合わせて、「1941年型装甲師団」2個とすることによって「装甲師団数を倍増」させている。それゆえ、「改編後の1941年型装甲師団」こそが<10-8>Pz.Dv.ということになる。加えて、オリジナル・ルールには『「1939年型装甲師団」と「装甲擲弾兵師団」の各1個を組み合わせて、「1941年型装甲師団」2個とすることによって「装甲師団数を倍増」させる』ためのルールがなく、実現不可能だ。

最初は、ソ連侵攻前のシナリオにおいては「1939年型装甲師団=<13-8>Pz.Dv.」、「1939年型ドイツ軍軽装甲師団=<3-8>Pz.Bd.」と捉え直し、「補充により再編を許可する」ことで全てがうまく行くかと思われた。実際は、各部隊毎に戦車数が異なるのにボトムダウンでは一律な扱いしかできず、ボトムダウンでの戦力決定はできないのだ。ではどうするか。答えは単純だった。「1939年型装甲師団」は戦車連隊を1個失ったのだから、「1941年型装甲師団」に「戦車1個連隊分の戦闘力を加えれば良い」のだ。このような形でボトムアップで考えると、各部隊の戦闘力差もうまく表現できることに気がついた。「1939年型装甲師団」基本形は「<10-8>Pz.Dv.(Full)+<2-8>Pz.Rg.KG=12」とすれば良いのだ。 $(12+8)/2=10$ である。

ポーランド戦での装甲師団配備状況

- ・第1・第2・第3・第4・第5装甲師団（1939年型装甲師団：戦車2個連隊+歩兵2個連隊編成が基本、戦車1個連隊は2個大隊編成）

- ・第1・第2・第4・第5装甲師団…戦車2個連隊
 …… $\langle 10-8 \rangle \text{Pz.Dv. (Full)} + \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KGx1}$
- ・第3装甲師団…戦車2個連隊連隊+戦車教導大隊
 …… $\langle 10-8 \rangle \text{Pz.Dv.} + \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KGx1} + \langle 1-8 \rangle \text{Pz.Bt.KGx1}$
 …… $= \langle 13-8 \rangle \text{Pz.Dv. (Full)}$
- ・第10/Div.Kempf装甲師団（1939年型装甲師団：編成未完結状態。詳細は後述）

- ・第1・第2・第3・第4軽装甲師団（1939年型軽装甲師団：戦車1個大隊+歩兵1個連隊編成が基本。後に、1940年型装甲師団へと改編）
 - ・第2・第3・第4軽装甲師団…戦車1個大隊+歩兵1個連隊
 …… $\langle 1-8 \rangle \text{Pz.Bt.KG (Full)x1} + \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KG (Full)x1}$
 …… $= \langle 10-8 \rangle \text{Pz.Dv. (-3)} = 3.0$
 - ・第1軽装甲師団…戦車1個大隊+歩兵1個連隊+戦車1個連隊
 …… $\langle 1-8 \rangle \text{Pz.Bt.KG (Full)x1} + \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KG (Full)x1} + \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KG (Full)x1}$
 …… $= \langle 10-8 \rangle \text{Pz.Dv. (-2)} = 4.0$

第10装甲師団/Div.Kempの再編成(1939)

ポーランド戦における第10装甲師団あるいはKempf装甲師団に関する評価は低い。名称は師団でも、実際には師団規模ではないことを理由に、その存在すら無視されている場合もあり、それぞれが全く別個の部隊のように捉えられている場合もある。しかし、実際の両者は、編制上は単一の第10装甲師団であり、東プロイセンのDiv.Kempは分割派遣された部隊である。

開戦前の第10装甲師団の編成状況

第10装甲師団司令部

第4戦車旅団司令部

第7戦車連隊

第8戦車連隊

第86歩兵連隊(自動車化)

師団直属砲兵大隊・偵察大隊（本来は連隊）

（所属するはずの第2歩兵連隊は未編成）

そもそも、当時の第10装甲師団は「編成作業中の部隊」に過ぎなかった。本来所属するはずの国防軍陸軍歩兵連隊が1個しか存在しなかった。この状況から、東プロイセンへと分派され、Div.Kempが編成されることとなる。

ドイツ本国内

第10装甲師団司令部…… $\langle 10-8 \rangle \text{Pz.Dv. (-2)} = 5.0 : \langle 2-8 \rangle \text{Pz.Rg.KGx2} + (\text{Pz.Bt.KG})\text{x1}$

第8戦車連隊

第86歩兵連隊(自動車化)

師団付属砲兵大隊・偵察大隊

東プロイセン内

第4戦車旅団司令部(Div.Kemp司令部)

第7戦車連隊…… <2-8>Pz.Rg.KG(Full) = 2.0

SSドイッチュランド連隊(自動車化)

……8-8>Pg.DV.(-2) = 4.0 : (Pg.Rg.KG)x1+(Pg.Bt.KG)x1

SSドイッチュランド連隊附属砲兵大隊・偵察小隊

ポーランド戦終了後、Div.Kempの編成は解かれ、第10装甲師団に復帰し、新たな歩兵連隊他の補充を得て「完全編成の1939年型装甲師団」となる。SSドイッチュランド連隊は第10装甲師団の指揮下を離れ、フランス戦を前にSS自動車化歩兵師団へと再編された。このような史実を鑑みれば、ポーランド戦での第10装甲師団/Kempf装甲師団の存在そのものを無視することはゲーム上できない。

フランス戦での配備状況

- ・第1・第2・第3・第4・第5・第10装甲師団（1939年型装甲師団：従来の編成を維持、戦車2個連隊編成+歩兵2個連隊編成が基本。）
 - ・第1・第2・第3・第4・第5・第10装甲師団……戦車2個連隊
…… <10-8>Pz.Dv.+<2-8>Pz.Rg.KGx1
(戦車教導大隊は原隊復帰、つまり戦車学校に戻り、教育に専念：※)
 - ・第6(第1軽)・第7(第2軽)・第8(第3軽)装甲師団（1940年型装甲師団：チェコ製戦車中心、戦車3個大隊：1個連隊は2個大隊編成)
……<10-8>Pz.Dv.+<1-8>Pz.Bt.KG
 - ・第9(第4軽)装甲師団（1939年型装甲師団：編成未完結状態での投入、戦車2個大隊(戦車1個連隊)のみ。ウェーゼル演習作戦に、1個大隊分を派遣。詳細は後述)
……<10-8>Pz.Dv.
- ※：戦車教導学校戦車教導大隊分(1MR+1IR)は補充プールに戻す

第9(第4軽)装甲師団の戦車部隊(1940)

オランダ方面に投入された第9装甲師団は、戦車1個連隊(総数153両)と最も少ない。これは、第9装甲師団に配属予定であった3個戦車大隊の内の1個戦車大隊(3個中隊)がウェーゼル演習作戦へと派遣されたからだ(デンマーク占領に派遣されたI号戦車の師団マークに注目していただきたい)。デンマーク占領に派遣されたのは2個戦車中隊で、ノルウェーに向かった1個戦車中隊はオスロ到達前に水没してしまった。そのため、ドイツ各地に保存していたNbFz 3両が急遽部隊化(PzAbt z.b.V.40)されてオスロに送られたがNbFz 3両はすぐには行動不能となってしまふ。デンマークにあった2個戦車中隊はデンマーク占領後、ノルウェー戦へと唯一の戦車部隊として投入される。最終的に、北部ノルウェーまで進出し、そのまま北部ノルウェーにおいて独立戦車大隊となり、第9師団に所属することはなかった。

※PzAbt z.b.V.40 : Panzer-Abteilung z.b.V.40 (第40特別戦車部隊)については、別稿で論じる。

ソビエト侵攻時の配備状況

- ・ 第1・第2・第3・第4・第5・第9・第10装甲師団 (1939年型装甲師団を改編し、戦車2個連隊から1個連隊へ：1941年型装甲師団)
- ・ 第9装甲師団……初めから戦車1個連隊編成のため、放出はない
…… <10-8>Pz.Dv.
- ・ 第1・第2・第3・第4・第5・第10装甲師団……戦車1個連隊：6個連隊分放出
…… <10-8>Pz.Dv.
- ・ 第6・第7・第8装甲師団 (1940年型装甲師団：)
 - ・ 第6装甲師団…戦車3個大隊を維持
…… <10-8>Pz.Dv.(Full)+<1-8>Pz.Bt.KG
 - ・ 第7・第8装甲師団……戦車1個連隊：それぞれ1個大隊 = 1個連隊分放出
…… <10-8>Pz.Dv.
- ・ 第11～第20装甲師団 (戦車1個連隊を受領し、既存の自動車化歩兵師団を改編して新編。3個連隊分は野戦補充大隊から。：1941年型装甲師団)
 - ・ 第11～第20装甲師団……戦車1個連隊：10個連隊分を受領
…… <8-8>Pg.Dv.(Full)+<2-8>Pz.KG(Full) = <10-8>Pz.Dv.
- ・ 第5軽装甲師団 (戦車1個連隊+歩兵2個大隊の編成未完結状態で北アフリカに派遣)
……<2-8>Pz.Rg.KG(Full)x1 +<1-8>Pz.Bt.KG(Full)x2
…… = <10-8>Pz.Dv.(-2) = 4.0

(北アフリカに、第5軽装甲師団・第15装甲師団を派遣。第2師団の独ソ戦参加は10月から。第5師団の独ソ戦参加は9月から。)

終わりに

以上のように、様々な部隊を表現できるようになった。加えて、「SSダスライヒ師団」、「SSトートンコップ師団」、「ラムケ旅団」、「グロスドイッチュランド師団」、「ヘルマンゲーリング師団」といった精鋭部隊についてもその編成過程を再現できる一覧表となったのは、喜ばしい限りである。

追記1：'39シナリオでの部隊数を数えると「装甲師団(<10-8>Pz.Dv.)としては1個多く、軽装甲師団(<3-8>Pz.Bd.)としては2個少ない」ことに気付くだろう。同様に、'40においては、謎のごとく軽装甲師団(<3-8>Pz.Bd.)1個登場する。これらについては、別稿で論じる)。

追記2：イギリス軍やフランス軍の「戦力段階一覧表」を作製する上で、3版までのドイツ軍装甲師団の歩兵補充ポイントのように補充ポイントの単純な積み上げはできなくなっ

た。単純な積み上げだと、「実際の歩兵大隊数と補充ポイント数が一致しない」ことにな
ってしまう。そのため、補充ポイントを実際の歩兵大隊数に合わせて見直し、4版とした。
そもそも<8-8>Pg.Dv.は歩兵6個大隊であり、6IRであるべきだ。それに戦車が付随して
いくのが各種装甲師団であり、各種装甲師団も6IRであるべきだ。更に、<3-8>Pz.Bdを
4版では廃止した。「オリジナルの<3-8>Pz.Bdの初期配置を生かす」ために「ユニット
として残そう」と思ったこと自体が誤りだった。1939年型軽装甲師団は「<10-8>Pz.Dv.
(-3)を用いて表す」ことが可能であり、<3-8>Pz.Bdのユニットは絶対に必要というもの
ではない。むしろ<3-8>Pz.Bdのユニットを必要とされる<1-8>Pz.KG／<1-8>Pg.KGの
ユニットに置き換える方が得策である。